

DALS ニュースレター No.17

死生学

東京大学

21世紀COEプログラム

生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築

Construction of Death and Life Studies concerning Culture and Value of Life

2007年3月10日

～21世紀COE「死生学の構築」を終えて～

目次

21世紀COE「死生学の構築」(平成14年～)を振り返って
島園 進

「多分野交流演習」と公開シンポジウム
竹内 整一

死生学の構築2002-7をふりかえって
熊野 純彦

死生学の構築2002-7を振り返って
一ノ瀬 正樹

人のいのちと物のいのち
小佐野 重利

ちょっとまじめに 「愛すること」の死生学へ
下田 正弘

死生学と社会学と 死生学の構築2002-7をふりかえって
武川 正吾

死生学と『それから』
麻生 享志

絶えざる対話と交流 「死生学の構築」特任研究員として参加して
黒岩 三恵

21世紀COEプログラム「死生学の構築」組織図

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>

21世紀 COE「死生学の構築」(平成14年～)を振り返って

島園 進(本 COE 拠点リーダー・宗教学)

平成14年、21世紀 COE 拠点形成プログラム「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」(略称、「死生学の構築」)の拠点リーダーを引き受けることになったときは、目の前が真っ暗になった。本務の宗教学の教育や自分の研究プランをかなりの程度、犠牲にせざるをえないことは明らかだった。また、プロジェクト自体の見通しも前途洋々とは見えなかった。新たな学問領域を数年間で形にしていくことなどできるだろうか。関係諸氏の協力は確かに得られるのだろうか。不安がどっと押し寄せ、いやいや背負わざるをえなかったというのが正直なところだ。

それからあっという間に4年あまりが経ち、当初の計画はいちおう結末を迎えようとしている。予想を上回る成果をあげ、死生学の研究・教育の世界的拠点としての基礎を築き得たのではないか。東大の人文科学に新しい領域をつけ加えることができたのではないか。過労で倒れることもなく、このようにノータンキともいふべき楽観的な見通しを述べる心のゆとりが出るころまで来たのはとにかく幸いであった。

これは事業推進担当者としてこのプロジェクトに加わって下さった教員諸氏、特任研究員・特任アシスタント・特任教務補佐員の諸氏のご活躍、そして歴代の人文社会系研究科長や副研究科長と教授会メンバー諸氏、文学部事務の皆さん、その他、まことに多くの方々のご支援のたまものである。当 COE 世話人一同(島園進・竹内整一・小佐野重利・下田正弘・一ノ瀬正樹・熊野純彦・横澤一彦・武川正吾)を代表して関係諸氏に深くお礼を申し上げたい。

* * * * *

限られた紙面ではあるが、この研究拠点形成プロジェクトで得られたと思われる主要な成果を以下に列挙しよう。まずは、研究や教育の知的内容の側面について述べる。

(1) 従来の「死生学」(Thanatology, Death Studies)のように死だけを孤立して取り上げるのではなく、死生を表裏一体のものとしてとらえる、新たな死生学(Death and Life Studies)の方向性を示すことができた。たとえば、死者とともに生きるという意識の問題、慰霊・追悼・記憶の政治性などの問題など、死の可能性をはらんで生きることに関わる諸問題が狭い意味の「死生学」と不可分の領域であることが明らかになった。

(2) 応用倫理教育プログラムと連携しつつ、多様なディシプリンを背景とした「死生の倫理」「死生の価値」研究の基礎を築くことができた。とりわけ、キリスト教や西洋文化の伝統に多くを負っている欧米の死生学に対して、アジアの文化伝統や歴史経験を踏まえ、比較の観点を重視したより包括的な死生学の輪郭が見えてくるようになった。死生をめぐる意思決定の問題、生殖や誕生、また人クローンや胚利用に関わる倫理の問題などを通して、この領域の理論的基礎づけの展望が開けてきた。

(3) 哲学、宗教、文学、造形芸術、表象文化などを素材として死生観の研究を深めるとともに、医療や教育やケアや福祉の現場で問われている諸問題を心理学・社会心理学、行動科学や社会学の観点から問い直す試みを進めることができた。文献や歴史的資料を素材とする研究の成果と、ケアや臨床の現場、フィールドワークや質問紙調査、実験室などでの研究成果とを有機的に結合し、死生に関わる総合的な知の領域を示すことができた。これは新たな死生学が広範な人文社会系の諸学に深い関わりをもつ営みであることを示していくことでもあった。

(4)医学や生命科学を中心とする自然科学の研究者と人文社会系の研究者との交流の機会を少なからずもうけ、理科と文科の垣根を越えて人間や生命について研究・考察する場を開くことに力を入れ、そうした方面での研究の可能性を広げてきた。生命倫理や老年学と死生学は重なり合う点が多いが、そうした領域において自然科学的な方法論と人文的な方法論との交錯がますます増大していくことを確認した。

次に、知的交流・知的創造の様態という点から述べよう。

(1)東京大学の大学院人文社会系研究科の多くの専門分野間の協力が進められた他、医学系研究科、教育系研究科、総合文化研究科など学内他部局との連携や交流が促進された。人文社会系研究科を中心としつつ、専門領域を超えた学内研究協力として、これまでにない活発なものとなった。学内諸分野の多面的な協力により、さまざまな知的可能性を引き出すことができた。

(2)特任研究員や特任アシスタントの採用によって、ポスドク(博士号取得後)や博士課程在学中の大学院生の教育・育成、また研究や相互交流の支援に大きな成果を上げることができた。特任研究員の採用にあたっては公募を行い、学内・学外の多様な分野の研究者を採用したが、このことによってひじょうに刺激的な研究環境を作り出すことができた。また、特任研究員や特任アシスタントに採用されていない大学院生やひいては学部生にも、新たな刺激と相互交流の場を提供することができた。

(3)死生学に関心をもつ国内および海外の諸大学や諸研究機関の方々と活発に交流し、多くの情報を共有することを通して研究協力の実をあげることができた。東京大学の死生学研究プロジェクトは世界各地の研究機関や研究者の関心をよび、多くの問い合わせや協力要請があった。実際は、イタリア、ドイツ、フランスで研究会議を行った他、北米やアジア諸国の研究者との交流が活発に進められた。また、国内の死生学や関連分野のネットワークの形成も大いに前進した。

(4)死生学はアカデミズムの外部で活動しているさまざまな分野の専門家や一般市民のニーズに応えようとする側面をもつ。そこで市民と対話し、そのニーズを知るための機会を設けるべく、公開のシンポジウムや講演会を頻繁に行った。また、シンポジウム等では、アカデミズム以外の著述家やジャーナリストや実践者にもパネリストに加わっていただく機会を積極的に設けた。これは従来の人文社会系の研究のスタイルに新しい要素を加えることになった。

* * * * *

すでに多くの成果を得たとはいえ、「死生学の構築」のプロジェクトが熟するにはまだ長い前途がある。そもそも死生学そのものが形成途上の学問分野である。世界的にも、全国的にも関連分野でさまざまな試みが進行しており、それらを受けとめつつ、世界的な研究拠点を形成していくためには長期にわたる取り組みが必要なのは言うまでもない。

COE「死生学の構築」チームとしても、これまでに達成できたものを基盤として、さらに発展させていくべく態勢を整えている。今後は上記のような成果を拡充していくとともに、教育面でのいっそうの充実が必要となる。平成19年度からは次世代人文学開発センターのなかに、財団法人上廣倫理財団による寄付講座、上廣死生学講座が発足する。また、21世紀COEを引き継ぐグローバルCOEの拠点形成プログラムに、新たな発展形態で応募することとなる。今後もこれまでも増して、積極的なご支援とご鞭撻をお願いしたい。

「多分野交流演習」と公開シンポジウム

竹内 整一（本研究科教授・倫理学）

2002年に始まるCOE「死生学の構築」の立ち上げには、僕はまったく参画していませんでしたが、動き出してみれば、いずれ組み込まれることは、ごく自然の流れでもありました。前年、2001年から「多分野交流演習」（「人間の尊厳、生命の倫理を問う」）を担当しておりましたし（これには、当時もかなりお忙しいはずの島園さんが毎回出席していました）、また同年より創設されていた「応用倫理教育プログラム」の責任者でもあったからで（同WGメンバーとして、後に世話人になる熊野・一ノ瀬・横澤、また武川の皆さんも参加していました）、これらの動きがやがてひとつの流れになっていくのは、それぞれの中身からしても当然だったということなんだろうと思っています。

世話人として全般的にプロジェクト運営に参加しながら、とりわけ僕自身の果たすべき役回りとしては、あらためて「死生学の構築」という意味も付与された「多分野交流演習」を担当すること、「応用倫理教育プログラム」との共催で市民参加型の公開シンポジウムを開催することでした。

まず、「多分野交流演習」の方ですが、これは、2003年まで「人間の尊厳、生命の倫理を問う」というテーマでやって、2004年からは「生命と価値」論のフロンティア」というテーマで展開してきました。月1回、1回3時間弱、平均60人ほどのゼミナリストと、ゆるやかに決めた上述のテーマのもと毎回相当異なる講師の発表テーマを議論してきました。医学・工学・農学など、理系を加えての、文字通りの「多分野交流」に、まったく議論がかみ合わないことや、深刻な誤解・対立を引きおこすこともたびたびでしたが、そうしたときもふくめて、どこにどのような違いがあり、どのような対立を引きおこすのか、は、はっきり見えてきますので、そのことだけでも貴重な交流だと決めこんでやってきました。教員ゼミナリストも常時、6、7人参加して、議論が白熱してきますと、どうしても教員同士の発言が多くなってしまおうのですが、そうしたあるとき、常連の猪瀬直樹さんらが、もっと学生さんたちの意見も聴こうよ、と提案したのに対して、これまた常連の西垣通さんが、こうした場はわれわれもまた一研究者として真剣に議論を戦わすべく来ているのだ、といった趣旨の反論をしていたことが印象的でした。理系・文系がともにひとつのテーマを議論し合う、こうした場があまりにも少ない、とも。

また、「応用倫理教育プログラム」との共催シンポジウムですが、これは公開シンポジウムとして広く一般に開かれたかたちで開催するという趣旨で年1回のペースで開いてきました。2003年には、小松美彦・田口ランディ・中神百合子・西垣通・鷲田清一の各氏をお呼びして「新しい死のかたち・変わらない死のかたち」というテーマで、ここ四半世紀で急激に変わってきたとされる死の受けとめ方について、いったい何が変わり、何が変わっていないのか、を議論いたしました。また、2004年には、広井良典・森岡正博・柳田邦男・若林一美の各氏と「死の臨床と死生観」というテーマで、今あらためて死生観を問題にすることがいかに可能か、またそれにともなってケアがどうかわりうるのか、といった問題を考えました。そして2006年には、大井玄・芹沢俊介・田口ランディの各氏と島園さんで「死の臨床をささえるもの」というテーマで、死の臨床で、死にゆくもの、死なれるものにとって、その場をささえるものは何か、をめぐって議論いただきました。いずれも僕はコーディネーターとして企画・進行をつとめていましたが、死生の問題ということもあって、市民の皆さんとも十分問題が共有されており、その関心の高さみみたいなものは毎回ひしひしと感じられましたし、いろいろありがたい応援もいただきました。が、その分、少しでもわれわれが、われわれのいわば業界用語に閉じこもった内向きの議論をしますと、きびしいご意見もまたたくさん頂戴いたしました。「多分野交流演習」ともども、ここにもまたたくさん課題が残されていると感じています。

死生学の構築 2002 - 7 をふりかえって

熊野 純彦（本研究科助教授・倫理学）

頂戴したお題は、「死生学の構築 2002 - 7 を振り返って」というものであったが（なお、仮名づかいに変更させて頂いた）考えてみれば、21 世紀 COE のプロジェクトで私が担った役割は、それほど大きなものではなく、世話人の一人とはいえ、私自身は研究プロジェクトの全体をふりかえりうる立場にはない。私個人がかかわった、ごく周辺的なことからのいくつかについてだけ、思いだすままにしるしておくにとどめたい。

2002 年の春、文学部教授会内に新設された「財務企画室」の室員に指名された。いわゆる競争的経費を獲得するための、いわば特別委員会である。赴任して以来、なお半年しか経っておらず、正直なところひどく当惑したが、学部長の指名によるもので、断る余地は（おそらくは）なかった。見よう見まねで、いくつかの仕事にかかわったが、最大のものが、「21 世紀 COE」の公募という、降って湧いたような案件であった。これが、5 年間にわたって継続することになった、本 COE の、なかば以上は外発的な発端である。COE のその後の展開は、この「外発性」という烙印を、すこしずつ削ぎおとし、「内発」的なプロジェクトとして脱皮してゆく過程でもあったようにも、個人的には思われる。

大学院では「基礎文化研究専攻」に属する、複数の室員とともに、急遽、応募プロジェクトの立案、書類作成に携わったけれども、なにやらひどく慌ただしかったということ以外に、当時の記憶はほとんどない。もとより、じぶんに都合の悪いことや辛かった過去は、早々に忘却してしまう体質であって、最近では中期記憶については、とんと自信がもてない。ひとつだけ憶えているのは、電子メールの添付ファイルでつぎつぎと送られてくる書類をとりまとめ、修正・統合する作業が、存外に変なものであったことくらいである。まず最初に、書きこむべき申請書類の膨大さに驚愕し、とりまとめの具体的なプロセスでは、マイクロソフト WORD 特有の種々の「お節介」機能に、なんどか泣かされている。

研究プロジェクトがスタートしてから携わった仕事のひとつは、研究誌『死生学研究』の創刊であった。第一号については、編集体制がまったく整っておらず、旧知のフリー編集者のかた、印刷所のひとたちと相談しながら、表紙の紙質、ミミのあるなし、印刷活字のポイント、その他、その他のことからひとつずつ決定していった。体裁、表紙等には、やや個人的な趣味も反映させ、素人雑誌にしてはやや凝ったものをつくることができた。なお、造本の参考にしたのは、かつて発行されていた独特な研究誌『社会史研究』である。とくに時効と思われるので、このついでに書いておく。雑誌を立ち上げるためには、どれだけの事項を決めなければならないか、一冊の雑誌をじっさいに作成するプロセスにあっては、どのくらいの雑事をこなさなければならないかを、身をもって体験したのは、ある意味で得がたい経験である。その後、編集者たちに対する対応が若干、変化した。締め切りは（なるべく）守るようになり、ゲラ刷りでの修正を最低限に抑えるようになった。（その結果、じぶんの文章や本に、誤記、誤植が増えたことは、思わぬ副産物である。）

シンポジウムについては、参加したものも、失礼したものもあるけれども、共通して感じた印象がひとつある。いわゆるアカデミズムの外部からお越し頂いたスピーカーに应答することばを、私たちはなお手にしてはいない、ということである。生を語り、死を論じ、生死のあいだに生起するいっさいを受容することばたちを紡ぎだすことが、死生学の課題のひとつであるとするならば、私たちはいまだ、そのために裁ちあわされたことばへの途を模索している途上にあるのだろう。このプロジェクトが継続するかぎりでは、そのことこそが不可避の課題となると思われる。

死生学の構築 2002 - 7 を振り返って

一ノ瀬 正樹（本研究科助教授・哲学）

21世紀COE「死生学の構築」が実際に活動しはじめる2002年夏、私は一年間の在外研究のためイギリスへ渡った。オックスフォード大学客員研究員として、さまざまな研究活動を行うことが目的だった。私は、それに先立つ期間、申請の段階から「死生学」プロジェクトに関わってきたのだが、その最初の年にプロジェクトから離れることになったのである。しかし、「死生学」のことが頭から消えることは決してなかった。滞英中に、まさしくオックスフォード大学のサヴレスキュ教授とトニー・ホープ教授が「死生学」によって東大に招へいされることになったと知らされ、彼らを訪ね、「死生学」プロジェクトを説明したり、意見交換をしたりした。また、やはり滞英中に『死生学研究』創刊号が準備されると知らされ、オックスフォードの図書館で文献を調べて、安楽死と「死ぬ権利」について論文を執筆し、投稿したことを思い出す。そして、2003年夏にイギリスから戻り、ようやく「死生学」プロジェクトに直接関わる態勢となった。その後の私自身の研究活動の半分ぐらいは、この「死生学」プロジェクトとともにあったといってもよい。ケンブリッジ大学のヒュー・メラー教授、チューリッヒのシャーパー教授、米国デューク大学のローゼンバーグ教授、オックスフォード大学の広瀬巖博士、オックスフォード大学のザングウィル博士、プリンストン大学のピーター・シンガー教授、そして「死生学」特任教授の加藤尚武氏など、多くの研究者の講演研究会のオーガナイズと司会を務め、私自身も大いに勉強することができた。私は、おもに英語圏の哲学・倫理系の講演研究会を組織する役目を一手に受け持っていたのである。

しかし、「死生学」プロジェクトを振り返って、私にとって特記すべきは、二度の国際シンポジウムをオーガナイズして、私自身提題も行ったことであつた。最初は、2004年12月に開催された「生死をめぐる同意と決定」シンポジウムである。それは、いわゆる「医療的意思決定」についての理論と実践の両面について徹底的に論じるという趣旨のもと、二日間に渡って行われた。一日目は「The Philosophy of Facing Uncertainty: Epistemic Limits, Probability, and Decision」と題して、すべて英語で行われた。ロンドン大学のホーソン教授とギリシア教授、メルボルン大学のブリスト教授、そして私自身が提題した。医療的意思決定を縁取る不確実性にどう立ち向かうかについて哲学的に掘り下げることを趣旨にした部会で、ベイズ主義、確率の解釈、認識の限界、といった理論的な問題が論じられた。「生死をめぐる同意と決定」というと、どうしても「インフォームド・コンセント」とか「自己決定権」といった問題圏のみを表象してしまう人が多いが、「医療的意思決定」が問題にするのは、そうした問題圏に先立つ、医療者側における診断や治療方針にかかわる不確実性の問題、そしてその上での意思決定の問題である。これはまことに深く人々の死生を左右する事柄であり、いわば死生の境界を区分けする営為である。二日目の日本人による「医療的意思決定」の実践面に光を当てた部会も含めて、こうした主題を取り上げることが出来たことは、死生学プロジェクトの裾野を広げるという意味で、大変に有意義であつた。このシンポジウムは後に英文 proceedings としてまとめられた。

もう一つの国際シンポジウムは、2006年12月に開催された「精神医療と触法行為の死生学 - 殺人行為をめぐる」である。これは、いわゆる触法精神障害者の刑事責任という主題を徹底的に論じることを目的としたものであつた。最初にロンドン大学LSEのジル・ピーエイ教授による「マクノートン・ルール」についての特別講演があり、その後日本人によるパネル・ディスカッションが行われた。精神科医の作田明氏、弁護士の八尋光秀氏、生物学者の長谷川真理子氏、そして私自身が提題し、精神科医の小田晋氏と特任教授の加藤尚武氏がコメンテータとして参加した。精神医療と司法とが交錯する問題に対して、生物学や哲学を交えて、問題の明確化・あぶり出しに見事に成功した企画だつたと思う。

以上の二つのシンポジウムを通じて、私は「死生学」プロジェクトのウイングを拡張してゆくということを強く意識していた。「死生学」というと、どうしても宗教や生命倫理を想起しがちである。けれども、それだけでは一個の自律した学問・ディシプリンとしては必ず頭打ちになる。やはり純粋に理論的な考察を加える方向性を加味しておく必要がある。私の試みが功を奏したかどうか、そしてそうした方向性を次の企画においてさらに展開していけるかどうか、それは今後の活動にこそかかっている。

人のいのちと物のいのち

小佐野 重利（本研究科教授・美術史学）

人文社会系研究科を挙げて大型の外部資金獲得のためにワーキング・グループが組織され、その一員を命じられた。本 COE プログラムの内部組織として編み出された世話人会メンバーうちの数人も、そのときに私と同じ運命を共にすることになった。専門分野あるいは専攻単位の従来の教育研究体制に風穴を開け、どうにか領域横断的なプログラムとすべく案出されたのが、この 21 世紀 COE プログラム“生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築”である。4 部会構成としたため、第二部会「生と死の形象と死生観」世話人を拝命した。

申請が採択されたのが、確か 2002 年 11 月のこと。とにかく同年度内に何か国際的な研究集会を開かねばならない。1999 年に人文社会系研究科が中心となって創設した東京大学フィレンツェ教育研究センターが当時、活動を展開中であつたから、同センターにいた土肥秀行助手に協力を仰いで、ひとつフィレンツェで開催しようということになった。ことの成り行きで私が音頭を取り、ウフィツィ美術館のあるウフィツィ宮殿内の図書館の壮麗な大広間を借りて、2003 年 3 月 21 日に開催した。本研究科が世話役を務める東京大学との学术交流協定相手のイタリア 3 機関から発表者を出していただき、こちらからの 4 発表者と併せ、洋の東西の美術と思想にみられる死後の世界観について議論しあう機会とした。

第二部会としては、こうした比較研究的な方法を一つの軸に据えながら、死生をめぐる形象文化に関わりそうなテーマ（たとえば、震災とその映像記録、考古学的な発掘による出土品からみた葬礼の風習など）を取り上げ、論じ合う機会を設けた。5 年間を振り返ると、他の部会に比べ決して十分に活動したとはいえず、忸怩たる思いである。

元々、美術史学の研究には美術の起原と密接に関わる死生観やその形象表現は当然過ぎることであつたから、文学とはたびたび交流することはあつたものの、正直に言って、他の研究領域と一緒にこのテーマを深く掘り下げて考えることになるとは思わなかつた。その意味で、特に宗教学、インド哲学、哲学、倫理学、社会学、心理学といった人文社会系諸学問の研究者たちに加え、医学系研究者とじかに接触交流し、各種研究会に参加し議論しあえたのは幸運であつた。

死生の問題は単に生物学的な問題である以上に、われわれ一人ひとりの宗教観や心の問題であることはいうまでもなく、わけても文化的な問題であると痛切に思うようになった。誰もが、知らず知らずのうちに死と生の線引きをしている。でなければ、その人の生きる意味や生きようとする活力も生まれまい。医療倫理の立場から、生命の始まりを初期胚のどの時期に置くか、医学的な死の判定を脳死に認めるか否かは、遺伝子治療や臓器移植などとの関連で不可避の問題である。あくまで生物学的な視点から解決しようとするのか、そこに倫理という観点、「心」をいかに持ち込むのか。

こうした議論を聴くなかで、私は人のいのちの問題を超えて、物のいのちの問題を深く考えるようになった。たまたま、チェーザレ・ブランディの名著『修復の理論』の邦訳（三元社、2005 年刊）に関わつたことも影響している。美術作品は制作された時点で、比喩的な意味で「生命体」となる。その成長は作品の審美的な評価や市場的な評価ばかりでなく、特に作品を受容する人の

心の成長に映し出される。「生命体」である以上、「老化」は避けられない。老化を防ぐ予防的な保存処理や修復は、医学用語を使えば、予防医学、外科手術などに相当する。いかに人類の傑作とよばれる美術品の前にも、やがては「死」という不可避の重い現実が立ちはだかる。

しかし美術品にも、人と同じように Afterlife が約束されている。それは人の集団的記憶としての文化の継承のなかで幾度となく蘇り、追慕される。まさしく、「死んだ作品」との対話、いな「死んだ作品」へも愛情を注ぐことによって、形象文化の継承の営為に与れたらと願うばかりである。

ちょっとまじめに「愛すること」の死生学へ

下田 正弘（本研究科教授・インド哲学仏教学）

ふつう恋心を抱けるような相手は、自分自身と交換することが可能な範囲の 商品 に限られる。私は お買い得品 を探す。...〔中略〕...このように二人の人間は、自分の交換価値の限界を考慮したうえで、市場で手に入る最良の商品を見つけたと思ったときに、恋に落ちる。

「五年間の活動のケジメを」と、いささかおそろしい課題を与えられたおり、ふと過ぎたのは、エーリッヒ・フロム『愛すること』(The Art of Loving)の、冒頭に近いこのくだりだった。恋に落ちたとき、それが商品の購入として暴かれようとは、そうそう思いいたらない。けれども、手にしたものが約束にたがう品であったと気づくのは時間の問題であって、黙ってがまんするか、丁寧に返品するか、お構いなしに捨て去るか、というさしあたっての選択肢が、ひとと場合によって異なってくる。「陰の2007年問題」とやらがあるらしく、大量の欠陥品(?)が一拳にリコールされる可能性があるという。使いふるしたあとそれはないだろうとも思うが、いまの時代なら許されるのだろうか。ただ、言わずもがなのことではあるけれども、相手をいとも自然に お買い得品 として見てしまったとき、それほど自然に 商品 になっていたのは、ほかならぬ自分である。

二人が出会って恋に落ちるときでさえそうなのだから、異なった領域の諸学がとどってあらたな学問の構築を試みるさい、知らないうちにお互いを商品化してしまう事態は、容易には避けがたいだろう。プロジェクトとしての成果報告が義務づけられ、それによって財政支援が決定されるのなら、諸学の出会いが「自分の交換価値の限界を考慮したうえで、市場で手に入る最良の商品を見つけ」る機会となるのもやむをえまい。

けれども、少なからぬひとが危惧するように、ここで お買い得品 を手に入れるため、みずから商品として売り込むことに成功するなら、人文学はその基礎を危うくする。生きることが 自 = 他 のあいだで何かを交換する活動である以上、この世では経済のことばが支配権を得、他のことばはその臣下となる危険がつけねに潜んでいる。たとえあたらしい学問の場を構築する理念で出発しても、じっさいにはそこが 商品先物取引市場 となってしまうなら、いつのまにか商品化された人文学は、それを載せた市場ごと、より大きなマーケットにやすやすと持ち去られるだろう。

経済の崩壊を恐れ、経済に依存したうえで他者と出会おうとするなら、そこには商品とその購入者という 所有 = 被所有関係 しか生まれえない。だが、死は、経済が崩壊し、所有が消え、商品が消失するできごとである。そして経済が消失しても生命は消失せず、生命活動をささえる なにか は存在しつづける。死生を論ずるについて、経済の圏内であってその利益調整を前提とする言説が優勢となるなか、人文学が手放そうとしなかったもの、それは経済の外に立って、その誕生から滅尽までを見とどけるこの なにか であり、それをあらわすためのことばの練磨であろう。

愛することと恋に落ちることは違う、とフロムは言う。愛は、相手のありのままのすがたに唯一無二性を知り、その成長と幸福をはぐくむ能動的活動であり、この愛をなしうるためには、ただ一人の孤独に耐える力を必要とする。愛には、自己以外のなにものにも依存することのない、他者との出会いがある。この五年間を振り返ったとき、文学部から発信された死生学には、どこかこれに近いとなみがなされている気がして、すこしばかり明るい気持ちになった。

死生学と社会学と 死生学の構築 2002-2007 をふりかえって

武川 正吾（本研究科教授・社会学）

私が死生学の21世紀COEに関わるようになったのは（おそらく）2003年度の途中からだった（のではないかと思う。最近短期メモリーが劣化しているので自信がない）。他の世話人の方々と違って、立ち上げの苦勞を共にしていないので、ここにCOE体験談を執筆するのは場違いかもしれない。しかし折角の御厚意なので、文字通り（というのは締切を大幅に過ぎていたから）末席を穢させていただくことにする。

私が死生学のCOEに参加するようになったキッカケも、他の人びとと同様、まったく思いがけないものだった。社会科学の21世紀COEに応募した社会学研究室の企画が落選し、落胆（じつは安堵）していたところへ、研究代表者の島菌進教授から協力を求められたのが始まりである。おそらく社会学も何らかの形でこのプロジェクトに関係した方がよいという研究科全体を見渡した大局的判断の結果だったと思う。ありがたい申し出だが、死生学についてほとんど何も知らなかったので戸惑った。しかし頼まれごとに対して元々深く考える質ではないので（一抹の不安を抱きながらも）快諾した。

参加してみてわかったことだが、他の世話人諸氏から社会学者としての私に期待されているのは、ケアという領域の探求だった（ケアは今回のCOEの重要な柱の一つであったから当然といえば当然である）。福祉社会学を専攻している関係上、20年以上前から、高齢者の介護に関する調査を何本が行い、論文も書いたことがあったので、ケアは比較的なじみのある領域だった。しかし私のやってきた研究は、ケア・サービスの必要推計や利用実態といったきわめて節物的なものであったから、果たしてどれくらい死生学に貢献できるのか心許なかった。とはいえ、引き受けた以上は何かをしなければならなかったため、当初はもっぱらケアに関するワークショップやシンポジウムに社会学の見地から協力することにした。それが自分への役割期待にこたえることだと考えたからである。

参加はしてみたものの、死生学というものに対してまったく違和感がなかったわけではない。しかしそれも次第に消えた。とくに南紀白浜で行われた次世代死生学研究会議におけるカール・ベッカー教授の所説にふれたことが大きいと思う。同教授が「次世代のための死生学教育」と題する基調講演のなかで、死生学教育における社会学の役割を明確に述べられたからである。それまで私は社会学徒として死生学という言葉は遠慮がちに用いていたが、以後、そうしたことはなくなった。

それだけでなく、世話人という立場上、社会学と死生学との関わりを考えざるをえなくなった。死生学のなかで社会学に対して期待されているのはケアであるが、はたしてそれだけでよいのだろうか。20年前の社会学と違って、ケアは、現在の社会学の人気テーマの一つである。これは社会学が死生学に貢献できる領域であろう。しかし社会学には“死”に関する研究の蓄積もある。

「死と死にゆくこと」(death and dying) に関しては、医療社会学者を中心に終末期の患者や医療者を対象にした質的な研究が積み重ねられてきた。死後に関しても、葬儀や墳墓に関する研究が連綿と続いている。そこで、COEの最終年度、私は、“死”を中心にした社会学のワークショッ

プを組織することにした。

“ケア”と“死にゆくこと”と“死”と“死後”が死生学にとって不可欠な契機であることを私は確信しているが、これらがどのようにつながっているのかということは、正直なところ、今でもよくわからない。現に生きている人間にとっては、これらが連続した一連の過程であることは自明であるから、そのような問いかけは無意味である。しかし(少なくとも社会学の)研究の現場では、それらは相互に無関係に独立して行われているのである。そこに居心地の悪さを感じるのは私だけだろうか。

2007年度からのグローバルCOEでは、私は、いろいろな経緯からジェロントロジーという学内の別のプロジェクト(の応募)に協力することになったため、死生学の方からは抜けざるを得ない。しかし世話人の多くは引き続き死生学に残って研究を進めることになっているので、そのなかの誰かが私の居心地の悪さを解きほぐしてくれるのではないかと期待しつつ筆を擱きたい。

死生学と『それから』

麻生 享志(本COE特任研究員・哲学)

われわれは「死生学の構築」をめざして、活動してきた。

本プログラムの発足当初から、ささやかながら(しかしわれわれの試みにおいて無視しえない一角を担うかたちで)わたくしは“若手”として多くの活動に参加してきた。肩書きは、「研究拠点形成特任研究員」というものであった。

とはいえ、21世紀COEプログラムへの募集に応募する段階では、企画に参画する機会もなく、採択されるまで、人文社会系研究科総力をあげた、かかる学際的試みについて知るところは少なかった。これは、わたくし自身の意識の低さ、(西洋)哲学研究の研究室内部にしか配視できなかった視野の狭さのあらわれだったかもしれない。当初、口頭にてこの拠点名を伝えられた時には、「シセイガク」を「市井」に関する学と聞き誤ったほどでる。“死生学”という、この耳慣れない学問を“構築”する、については研究拠点を形成する研究員に応募する機会を与える、という。「いわゆる既成の生命倫理学に対して、医療経済分野で到達されている学知の、その蓄積を武器に、一石を投じたい」との、年来の希望をかたちにする好機として、強い“野心”を感じたことを覚えてい


かくして五年間を夢中で走り抜けた。それが、貴重な機会であり、新奇鮮烈な知見に多々触れることになり、自己の可能性を大きく広げ、いわゆる“成長”を得たことについて疑いはない。その間に、当初その姿を想像できなかったこの“学”が、数々の研究会議を果たしていくことでかたちを見せはじめた。同時に機関誌『死生学研究』所収の諸論文が、具体像の細部をあらわしはじめるにつれ、その途方もない規模の全容も、おぼろげながらうかがえるようになってきた。現在東大出版会で計画されている、仮題「シリーズ・死生学」5巻(予定)の刊行のあかつきには、斯学の基礎として、精読に値する有益な文献となり、現時点で果たされた“構築”をより明確に示すことができるであろう。

望まれるのは、東大死生学(すなわち「死生学」)の、全体を論じるような概説書であろうか。「多くの大学が、死生をテーマとする講義などを設置する」という趨勢下で、それは、教科書として通用する入門書的作用も期待されよう。この五年間を総括するために、そうした基本文献の刊行は、最も望ましいことのように思われる。そうした書物において、本プログラムで見出された成果のいくつかを例示するとともに、さらに、これまで深めることのできなかった問題や、手薄な各分野についての言及・警見をも加えたい。(さらに先の課題としては、『死生学事典』の編纂、あるいは死生学テーマをピックアップして、一般向けに簡便な読み物とした『死生学・キーワード』のような書物 後者については『次世代死生学論集』所収の拙論を参照 も考えられるであろう。)

将来の“課題”といった留保を付した上で、ここで、わたくしもその一員であるいわゆる“若手研究者”に、こうした壮図を帰したいと思う。若手の研究者たちが18回にわたって積み重ねてきた「死生学研究会」は、学科・専攻の垣根を越えて、死生学全体を見渡す上に多大な寄与を果たすであろう。本プログラムで斬新さを誇れる点に、内実の伴った“学際性”が指摘できる。未来ある若手こそ、本死生学のこの面を発展させることが出来る筈である。

こうした視野に立ち、研究環境も少し考えてみたい。『死生学研究』は、斯学に関心をもつ江湖の好評を得ており、若手にとっての貴重な研究発表の機会となっているが、刊行主体であるCOEプログラムの時限性から制限が大きい。同誌所収より編んで、『若手論文選』のような企画の公刊も励みになるであろう。国際シンポジウム「生死をめぐる同意と決定」で、パネリストとして発言できたことは、わたくしにとって大きな経験となったが、このような機会がより多くの研究員に与えられてよい。若手による公開の研究会議（国内）を実現することも目指したいことの一つである。研究スペースや、時間の問題もある。

大学院生（および学部学生以下）に対する、死生学企画による教育的活動も来年度以降にますます力を注ぐべき（この意味で、死生学を掲げた寄附講座の発足に対して喜ぶたい）であろうが、他方いわゆるポスドク・クラスには、育成の視点と共に重要なのが、研究事業推進の（実力に見合った）分担者的役割であると言えるのではないだろうか。この意味で、「次世代」と呼ばせず、“現世代の一角”と扱われるべく、多大の努力を要するのである。2007年の年初である今、自戒をこめつつ、いわゆる若手による一層の奮起を誓いたいと思う。それが、この五年間に構築をなしとげ得た“死生学の蓄積”に対して、報恩として可能な唯一のことであると思うからである。



絶えざる対話と交流 21世紀COEプログラム「死生学の構築」 特任研究員として参加して

黒岩 三恵（本COE特任研究員・美術史学）

美術史研究室の小佐野重利先生に21世紀COEプログラム「死生学の構築」についてうかがったのは、厳冬の最中だった。概要を説明くださり、学際的な研究の一環として美術における死生の形象表現の研究に携わるように、と当プログラムにご推薦くださった。当初は1年間というお話で、ゴシック期フランスを代表する図解聖書の一つである『ビープル・モラリゼ』における図像の研究をすることを急遽決めた。当時は予想しなかったことだが、結局は当プログラムに4年間あまり関わることになった。まだ新しい学際的な研究領域の発展を身近にみることもできたのは、美術史研究の枠組みの中で活動を続けてきた私にとって大変刺激と示唆に満ちた日々であった。

特任研究員の役割は、研究成果を研究誌『死生学研究』に公にするだけではない。領域横断的な研究会における発表と討論を通じて、死生を研究することの複合的な広がりをもとに確認し、新たな問題系を模索していくことにこそ重点があるといえる。また、事業推進担当の先生方が企画された種々の趣旨を持つシンポジウム、ワークショップ、講演会の運営を円滑に遂行する実働部隊としての任務も、特任研究員の重要な仕事の一つである。準備・運営を通じて、大学の内外で活動をされる多彩な顔ぶれのスピーカーが一堂に会して講演、報告、提題を行い、時に聴衆を含めた討論を行うことの可能性と豊かさ、あるいは直接対話をもたらす場のダイナミズムによって、死生学の骨格や肉付けが明確化するプロセスを目の当たりにすることができたわけである。

どの講演会やシンポジウムも思い出深いのが、特に2006年2月に開催された国際研究会議「死とその向こう側」そして同年9月にフランス・トゥルーズで開催された研修研究会議について振り返ってみたい。

「死とその向こう側」は、日本人研究者とフランス人研究者がおおよそ10名ずつ参加して、2日

間にわたり開催された。日本側からは日本文学、日本や中国、インドの宗教学、文化人類学、フランス文学等の研究者が、フランス側からはパリ国立極東学院やトゥルーズ人類学研究所に所属するフランス、南米、インド、中国、ユダヤなどの宗教学、人類学を主体とする研究者が報告を寄せ、古今東西における死・死者の定義とそれらを受け入れる生者の態度の多様性について討論する場となった。

その半年後に行われたチュービンゲン＝トゥルーズ研修研究会議の後半に当たるトゥルーズ研修研究会議は、「死の向こう側Ⅱ」という題目からも察せられるとおり、2月に開催された国際研究会議がホーム戦とすればアウェー戦的な位置づけを持っていた。ただし、若手研究者が報告の主体を担い、教授陣が基調講演や司会で脇を固める陣容である。報告は、現代フランスやギリシャの舞台芸術や葬送儀礼、現代日本の初等教育、文学やマンガにみる死生観、近代以前の日本やフランスにおける死生観などをテーマとした、若々しく多彩なものが揃った。

この2つの研究会議では、私の役回りには違いがある。2月の「死とその向こう側」では立案者でいらっしゃる拠点リーダーの島菌先生と日本文学の多田先生、フランス人参加者の代表者ブッシィ先生が決定した案を実行に移すべく、準備・運営に携わる事務局と研究員との間の統括的なコーディネートをを行った。他方、9月のチュービンゲン＝トゥルーズ研修研究会議では、研究報告をして国際的な討論と対話に参画した。日本の死生観を紹介するという趣旨から、『ピーブル・モラリゼ』との比較の点からも興味を抱いていた『平家納経』を題材に、在家信者の死生観について装飾の分析を試みた。

この4年余りで実感したことは、普段は研究領域や立場を異にする者同士が一つのテーブルを囲み、専門家の立場から見解を述べ、同時に相手の見解に耳を傾け、討論を重ねることの面白さと重要性である。西洋中世美術という私の本来の土俵にあっては、今日焦眉の問題となっている現代医療の抱える問題や展望、あるいは私たち一人一人が死や生を捉えあぐねている実情の緊急性には関心が向きにくかったことは確かである。この21世紀COEプログラム「死生学の構築」は、時事的な研究課題について蒙を開かされたばかりではなく、すべての研究領域の根底には生と死の問題が横たわっていることを改めて気づかせてくれた。特任研究員として受け入れてくださり、ご指導くださった先生方をはじめ、刺激的な意見の交換を行った研究員諸氏にこの場を借りてお礼申し上げ、当プログラムが近い将来、より多くの先生方や研究員、大学院生の参画によって、さらに発展することを願ってやまない。



写真：次世代死生学研究会議（2005年秋、於熊野）を終えて

21世紀COEプログラム「死生学の構築」組織図

事業推進担当者

拠点リーダー

島 蘭 進 宗教学宗教史学

第一部会：死生学の実践哲学的再検討

竹内 整一 倫理学 世話人
熊野 純彦 倫理学 世話人
一ノ瀬 正樹 哲学 世話人
松永 澄夫 哲学
関根 清三 倫理学
榊原 哲也 哲学

第二部会：生と死の形象と死生観

小佐野 重利 美術史学 世話人
木下 直之 文化資源学
大貫 静夫 考古学
後藤 直 考古学（～H15.3.31）

第三部会：死生観をめぐる文明と価値観

下田 正弘 インド哲学仏教学 世話人
多田 一臣 国文学
市川 裕 宗教学宗教史学
池沢 優 宗教学宗教史学
小島 毅 中国思想文化学

第四部会：生命活動の発現としての人間観の検討

武川 正吾 社会学 世話人
横澤 一彦 心理学 世話人
立花 政夫 心理学
林 徹 言語学
赤林 朗 医療倫理学
甲斐 一郎 健康科学
西平 直 教育学
秋山 弘子 社会心理学
杉下 守弘 神経科学（～H15.3.31）

研究拠点形成特任研究員

第一部会

麻生	享志	哲学	H14 ~
栗原	剛	倫理学	H15.4.1 ~
福島	勲	フランス文学	H17.4.1 ~
山口	裕之	哲学	H14 ~ H15.9.31
山本	芳久	哲学	H14 ~ H15.3.31

第二部会

木村	覚	美学芸術学	H15.4.1 ~
黒岩	三恵	美術史学	H14 ~
福岡	真紀	文化資源学	H14 ~ H18.8.31

第三部会

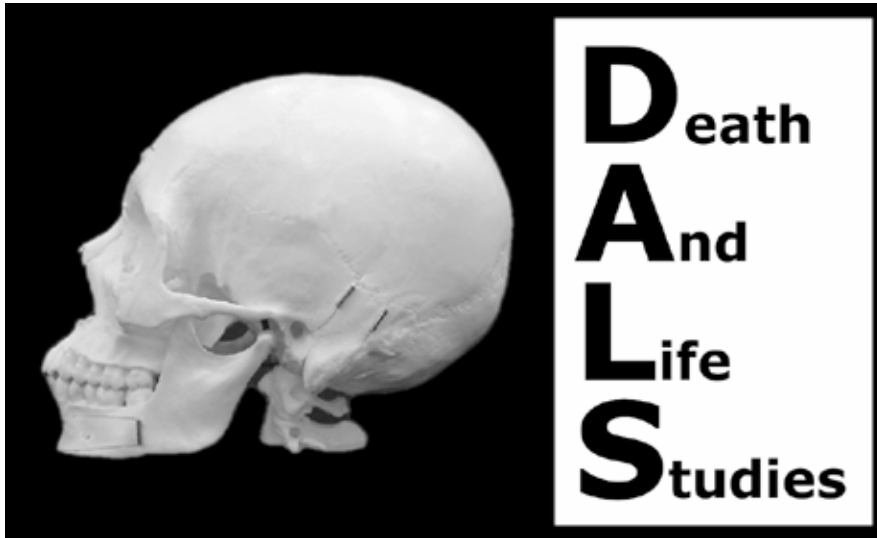
飯田	篤司	宗教学宗教史学	H14 ~ H17.3.31
佐藤	知乃	国文学	H14 ~
嶋内	博愛	文化人類学	H17.4.1 ~
杉木	恒彦	宗教学宗教史学	H14 ~ H19.2.28
種村	隆元	インド哲学仏教学	H15.4.1 ~ H17.3.31
前川	健一	インド哲学仏教学	H14 ~
矢野	秀武	宗教学宗教史学	H14 ~ H18.3.31

第四部会

秋山	茂幸	教育学	H17.5.1 ~
金児	恵	社会心理学	H15.4.1 ~ H18.3.31
竹尾	和子	心理学	H14 ~ H15.3.31
陳	南澤	言語学	H14 ~ H15.3.31
新島	典子	社会学	H17.4.1 ~
仁平	典宏	教育学	H16.4.1 ~
松本	聡子	精神保健学	H17.4.1 ~

事務補佐員

中瀬	ちづる	H18.3 ~
安野	裕美	H14 ~
吉田	理恵	H14 ~ H17.12.31



「DALS ニュースレター」

第17号

平成19年3月10日発行

東京大学大学院人文社会系研究科

21世紀COE “生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築”

責任者 島藺 進

TEL & FAX 03-5841-3736